



日本記者クラブ

2012年度日本記者クラブ賞・同特別賞
受賞記念講演会

2012年6月15日

「3.11大震災」あの時、そして今

日本記者クラブ賞

萩尾信也 毎日新聞記者

(東京本社社会部部長委員)

同 特別賞

福島中央テレビ報道制作局

佐藤 崇 福島中央テレビ報道制作局長

石巻日日新聞社

武内宏之 石巻日日新聞常務取締役報道担当

司会 瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員
(中日・東京新聞論説委員)

日本記者クラブ Youtube チャンネル

<http://www.youtube.com/watch?v=ukvzccw4KkM&feature=plcp>

©公益社団法人 日本記者クラブ

【贈賞の理由 受賞者・社の紹介】

■日本記者クラブ賞 萩尾信也（はぎお・しんや）毎日新聞記者（東京本社社会部部長委員）

東日本大震災の直後から、出身地でもある岩手県の三陸沿岸に住み込み、被災した人々に時間をかけてじっくり話を聞く長期現場取材をひとりで続けた。ひとりひとりのあの日のすさまじい体験。愛する家族を失った悲しみ。揺れ動く心と思い。そして生きる意味を見出す再生への過程。それらを綿密に記録し、方言を生かした印象深い文章で企画「三陸物語」を2011年5月から2012年3月まで201回連載した。多くの記者が現地取材ルポを発表したが、中でも萩尾記者の仕事は出色であり、日本のメディアの大震災報道を代表する優れた記事である。大震災の年の日本記者クラブ賞に最もふさわしいと高く評価された。

＜経歴＞ 1955年6月長崎県生まれ。56歳。小学校3年から高校2年まで岩手県釜石市に在住。早稲田大学卒。1980年毎日新聞社入社。東京本社社会部、外信部、バンコク支局特派員、サンデー毎日編集次長などを経て、東京本社社会部部長委員。連載企画「三陸物語」は2011年5月2日から毎日新聞に連載した。これまでの連載企画に「生きる者の記録」「がんを生きる 寄り添いびと」「ともに歩く 目の探訪記」など。

■日本記者クラブ賞特別賞 福島中央テレビ報道制作局

福島中央テレビ報道制作局は、東京電力福島第一原子力発電所事故で、2011年3月12日の1号機水素爆発の瞬間を世界のメディアで唯一、自社の監視カメラでとらえた。爆発の映像は4分後に緊急放送し、約1時間後にはキー局から全国放送された。当時、首相官邸は「白煙があがっている」という情報しかなく、1号機の状況を把握していなかった。爆発映像を見た福島県民は異常に気づいて避難を始め、政府は前例のない非常事態を初めて知った。また、3月14日の3号機水素爆発の映像も唯一、生中継で速報した。まさに、衝撃の映像であり、原発神話の崩壊と日本の危機を映像で日本と世界にまざまざと示した。福島中央テレビは万が一の事態に備えて監視カメラを維持し、大震災のあと他社のカメラが機能を失う中、ただ一台、生き残るための努力を続けていた。この映像がなければ、国民も政府も水素爆発を知らないまま危険な時間をいたずらに過ごす事態に陥りかねなかった。人々に事実を速報するというジャーナリズムの使命を果たし、国民の知る権利に応えた報道である。初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。

福島中央テレビ（本社・福島県郡山市）は1970年開局。略称はFCT。日本テレビ系列。<http://www.fct.co.jp/>

■日本記者クラブ賞特別賞 石巻日日新聞（いしのまき ひび しんぶん）

石巻日日新聞は、東日本大震災の停電と津波で社屋が被災し、輪転機が水没して使えなくなった。「ペンと紙さえあれば」と新聞発行をあきらめず、手書きの壁新聞づくりを決断。記者が浸水した被災地を歩き取材した原稿を、油性ペンで新聞用ロール紙に書き込んだ。壁新聞は6枚作り、避難所6カ所に張り出した。3月12日から17日まで壁新聞の発行を続け、避難者に貴重な情報を提供した。国内だけでなく世界にも大きな反響をよび、米ワシントンの報道博物館、ニュージウムは壁新聞の現物を展示し、国際新聞編集者協会は特別賞を贈った。日本のジャーナリズムが持つ気概と底力を地元の読者だけでなく、広く日本全国と世界に示した。どんな苦境に追い詰められても、ニュースを発信し続けた記者魂は全国のジャーナリストにとって励みであり、誇りである。極限状況にもかかわらず、いや、むしろ極限状況だったからこそ、読者と深くつながるという新聞の原点に立ち返った。日本の報道史に残る壁新聞づくりであり、初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。

石巻日日新聞は1912年創刊の夕刊紙。今年100周年を迎える。宮城県の石巻市、東松島市、女川町をエリアに発行。震災前の発行部数は1万4000部。<http://www.hibishinbun.com/>

■贈賞式でのあいさつ <http://www.jnpc.or.jp/files/2012/06/dc1377b78380dbb7428e55ac1e94f031.pdf>

■日本記者クラブ会報6月号「受賞のことば」<http://www.jnpc.or.jp/files/2012/06/jnpc-b-201206.pdf>

中井良則・日本記者クラブ専務理事あいさつ

日本記者クラブ賞・同特別賞受賞記念講演会「3.11大震災 あの時、そして今」にお越しいただきありがとうございます。最初に日本記者クラブとクラブ賞についてご説明します。

「記者クラブ」というと、首相官邸や県庁、市役所、警察などにある記者クラブを想像されるかもしれませんが。そういった行政機関の中の部屋をかりて記者が詰めている、いわゆる記者クラブの総元締めが日本記者クラブじゃないのか、と思われる方もいらっしゃると思います。それは大きな誤解です。

われわれ日本記者クラブは 1969 年に日本の新聞、テレビ、通信社が集まって創設しました。報道機関や記者が会員となり、会費を払い、その会費で運営しています。記者会見を開くのが最も大事な仕事です。

皆さんが今いらっしゃるこの 10 階ホールも記者会見の会場として、いつでも使えるように我々が費用を負担し、維持して、準備をしている場所です。例えば、総選挙前に主要政党党首が集まって党首討論会をやりますが、それも我々が主催し行っている記者会見のです。

日本記者クラブのメンバーの数は報道機関がおよそ 130 社、会員がおよそ 2500 人となっています。日本で唯一のナショナルプレスクラブでありまして、取材と報道の拠点として機能しているということです。

さて、毎年、クラブの会員や会員社で働く記者を選考し、日本記者クラブ賞をさしあげています。記者が選ぶ、その年のベスト記者です。今年は 46 人目となります。

今年の日本記者クラブ賞は毎日新聞の萩尾信也(はぎお・しんや)さんです。

お手元の資料にありますように、昨年の東日本大震災の直後から三陸沿岸に住み込み、被災者の方にインタビューして、「三陸物語」という長期連載を 201 回 1 人で書きました。

萩尾さんは、長く障害者の取材・報道にも取り組んでおり、今日はこれまで萩尾さんが出会った聴覚障害のある方々にもたくさん来ていただきました。ご覧のように手話通訳と文字通訳

の方もお願いしております。本当に、ああやってすらすらスクリーンに文字が出てくるのは驚きですね。

また、今年から日本記者クラブ賞特別賞を新たに始めました。クラブの会員以外にも日本にはいろいろな形でたくさん記者や報道機関が活躍しています。そういった業績にも目を広げて、開かれた賞にしたいというものです。

特別賞のお二人にきていただいています。まず、福島中央テレビ報道制作局を代表して、報道制作局長の佐藤崇(さとう・たかし)さんです。東京電力福島第一原発の水素爆発の瞬間をメディアとして日本で唯一、撮影し、緊急放送しました。

そして、石巻日日新聞(いしのまき ひびしんぶん)を代表して、常務取締役報道担当の武内宏之(たけうち・ひろゆき)さんです。皆さんご存じのように新聞発行ができなくなりましたが、「紙とペンさえあれば」と壁新聞を発行し、避難所の住民にニュースを届けました。入り口のところに壁新聞の実物を持ってきていただきました。

なお、萩尾さんの『三陸物語』と石巻日日新聞の『6 日間の壁新聞』の 2 冊を会場入り口で販売しております。

これから、東京新聞論説委員で日本記者クラブ企画委員の瀬口晴義(せぐち・はるよし)さんの司会で、3 人の方に話していただきますが、いずれも、昨年の東日本大震災の取材・報道を代表するといっていいい優れた報道活動であると申し上げたいと思います。

大震災のあと、マスメディアの報道に対してはいろいろな形で批判や疑問が聞かれました。われわれメディアはそうした批判を受け止め、真剣に取り組まなければなりません。ただ、誤知りに「どうせマスコミはダメなんだ」みたいなことを簡単にいってしまう人もいます。

ちょっと待ってください。

今日ご紹介する 3 人のように、地道な努力を積み重ね、人々に何とかニュースを伝えようともがいている記者が日本中にいます。大震災という日本が体験した未曾有の危機に際して、自

分たちができる仕事をとにかく続けるんだと、寝食を忘れて取り組んだ記者があちこちにいます。私たちはそういった全国の記者の代表としてこの3人の方を紹介でき、とてもうれしく思っています。また、誇りでもあります。

それでは、瀬口さん、お願いします。

司会・瀬口晴義日本記者クラブ企画委員（中日・東京新聞論説委員） これから日本記者クラブ賞・特別賞受賞の方々に記念講演をしていただきます。最初に日本記者クラブ賞を受賞された萩尾信也さんにお話をうかがいます。

登壇者の紹介は配られておりますので、細かくは説明しませんが、震災当日、萩尾さんは出先から戻ってこられて、編集局長に直訴するんですね。「現場に行かせろ」と、かなり強い言葉で言ったそうです。

萩尾さんが編集局長に直訴した時に考えたことが、この『三陸物語』の本に書かれています。「ロートル記者に書ける物語もある」と。1年間、現地に泊まり込んで取材して書かれたものを見ると、“ロートル記者”だからこそできた、そんな感想を持ちました。では萩尾さん、よろしくお願いします。

萩尾信也・毎日新聞記者 （立ちあがって、手話でスピーチ。音声なし）

◆あなたがもし逆の立場だったら

今、つたない手話でごあいさつをしました。手話をご存じない方は、何が何だか、さっぱりおわかりにならなかったと思いますが、ご覧になっているうちに、意味がなんとなく分かるような気がする部分もあったのではないかと思います。

音声による言葉に置き換えれば、「こんばんは、萩尾です。毎日新聞の記者です。今日は会場に、私の友だちでもある、ろうあ者や聴覚障害者の方々がいらっしゃいます。でも、私は手話が少ししかできません。ですから、講演は手話通訳をお願いしてあります。よろしくお願いします

します」というようなことを手話で申しあげました。

もし、世の中が手話を使う人が圧倒的に多くて、音声による言語を使う人が少なかったら、手話ができない人たちはいろいろな面で不自由を感じると思います。

ところが現実には、音声による言葉が多数派の世の中ですから、聞こえないということが一体どういうことなのか、なかなか理解されないでいると思います。最初にわざと手話でごあいさつしたのは、それを逆に体験していただきたかったからです。

では、もしこの会場に目の見えない方や視覚障害者の方がいらっしゃったら…実はこの会場に、一緒に山登りをしている目の見えない友達がいるんですが…私のあいさつはどうなるでしょうか。その場合は「私は年が56歳です」「身長は179センチです」という情報を付け加えます。年齢とか、身長は視覚によって何となくわかりますよね。見た目より老けているとか若いというのもありますが、見えない人にはそれがわかりません。

もうひとつ、「盲ろう者」という言葉をご存じでしょうか。聴覚と視覚に障害がある方です。目が見えず、聞こえない方々です。もし、盲ろう者の方々とお話をするとき、私はあいさつに、「私は男性です」というのを付け加えます。なぜでしょうか。性別は、相手の声である程度わかりますよね。でも、盲ろう者は、その両方の情報がありません。

ちなみに盲ろうの人は、相手の手話をこのように（手話通訳者と手をあわせながら）触る「触手話」とか、左右3本の指を使って相手の手の甲や指に点字タイプライターを打つ要領で打ち込む「指点字」という形で会話をします。音声による言葉でもなくて、手話という視覚的な言語でもなく、触るコミュニケーション方法だと思っています。

このたび、私が日本記者クラブ賞を受賞することになった「三陸物語」という記事があります。私は小学校3年から高校2年まで岩手県釜石市に暮らしました。そして震災直後から1年

にわたり、現地で取材を続けて、201 本の記事を書きました。それをまとめて『三陸物語 被災地で生きる人びとの記録』という本と『生と死の記録 続・三陸物語』という本を出版しました。手前味噌で恐縮ですが、お読みいただければ幸いです。

「三陸物語」の記事の中には被災地で暮らしていたろうあ者や盲人の方、あるいは盲ろう者も登場します。私は、障害がある、あるいは障害がない、という形で彼ら取材したのではありません。聞こえない人や見えない人の思いを知りたいという一心で取材しただけです。彼らの暮らしぶりを細かく申しあげる時間はありませんが、被災後に彼らの状況を物語る小話をひとつ紹介します。

舞台は、震災から数日後の岩手県内の避難所です。電気もガスも水道も通じなくて、灯油やガソリンもない中で大勢の人が肩を寄せ合って避難生活をしていました。そこに市役所の職員がやってきて、大声で言いました。「耳の聞こえない人はいませんか？ いらっしゃったら手を挙げてください」

お分かりになりますよね。聞こえない人に「手を挙げてください」と声で呼びかけているんです。まさにブラックジョークの世界だと思いませんか。きっと悪気はないんでしょうね。想像力が欠如していたんじゃないかなと思います。

ただ高齢化が進んで、聴覚に不具合というか、だんだん聞こえなくなり見えなくなる人たちは身近にいますし、明日は我が身であります。ですから決して他人事ではない、そういう思いで記事にしました。

生き抜くことに必死で、混沌とした状況の中で、いろんな情報から取り残された人は、かなりの数いますが、その実態や彼らの思いはなかなか伝わっていない。例えば、耳が聞こえないというのは見た目ではわかりませんが、行動している様子で、何となくこの人は目が不自由なのかなとわかり、回りもアクションを取りやすいのですが、聞こえないというのは見た目ではなかなかわかりません。

◆人生で一番大切なものは？

話を進めます。できれば皆さん、一緒に考えてください。

人生において、大切なものは何だろうか。かけがえのない人とは、皆さんにとって誰なんだろう。どうか考えてみてください。そしてもうひとつ。残された人たちが生き続ける意味というものは、どういうことでしょうか。考えていただきたいと思います。

私自身もこの1年間に渡って被災地で生活が続けながら、何度も何度も、人の心というものは一体どうやってできているのか、その気持ちはどうやってわき上がるものなのか、ということを考えていました。

人間というものは、当たり前のように毎日を暮らしていると、日常の幸せとか、自分の傍らにいる人のぬくもりを忘れがちだと思います。

不条理で理不尽な形で、大切な人、あるいは住みなれた家や故郷を、突然失うということは、耐え難い苦しみを伴いながら、人々をそうした問いかけに対峙させるものではないかと私は感じました。

例えば夕食で食卓を囲む家族とのとりとめの会話がありますよね。いつもと変わらぬおふくろの味とか、うるさい小言。あるいは、しょうもないおやじのだじゃれや加齢臭。反抗期にさしかかった子どもたちの生意気な態度や物言いもあると思いますよ。すっかり物忘れが激しくなったじいさん、ばあさんの口癖もあるでしょう。

そんなとりとめのないことが、喪失を経験して、なぜにこれほど愛おしく思えてくるのか、私の中で大きく広がってきたのです。

そういう問いかけを、多くの日本人につきつけたのが、2011年3月11日の東日本大震災ではなかったかと、私は思っています。

◆あの夜、満天の星空だった 失って初めて見えてくるものがあった

三陸物語では被災地で私が出会った人々の営みとか思いを綴りたいと思いました。

ものすごい揺れがおきて、大きな津波が襲いかかったあの夜、三陸海岸の夜空には、こぼれ落ちそうな星がきらめいていたそうです。

九死に一生を得た高校時代の後輩もいました。避難先のビルの屋上から夜空を見上げたそうです。かつて見たことのないような満天の星空だったと、彼は言いました。彼は日中、津波で家ごと流されベランダに立ったままだった人を目の当たりにしています。何もできなかったそうです。

夜になると闇の中に、瓦礫で埋もれた街のシルエットが浮かんだそうです。避難所の屋上で、避難した人たちと一緒に空を見上げながら、彼はこういう話をしたそうです。「電気もない時代には、みんなはこんな夜空を見上げていたんだろうか」。涙を交えながら言葉をかわしたそうです。

闇が深いほどに、星は輝いて見えますよね。都会で見るものとは違います。それと同じように、死のかたわらで、命はかくも光を放って、いとおしく見えるものだろうと、私は学びました。失ってはじめて見えてくるものがあるように思います。

◆じいの流れ星…たくさんの夜空の物語

「三陸物語」には、このように幾つも夜空の物語が登場します。

漁師のおじいさんを津波で亡くした女子高生がいました。津波の後、彼女は歩くのが不自由な年寄りや地元の顔見知りの年寄りを、何人も背負って、避難所と津波の跡を往復しました。

彼女はその夜、消防士の手伝いをし、それがちょっと休みになったときに、外に出て空を見上げて、流れ星を見たそうです。こういう表現をしました。

「見たことのないほど大きくって、緑色に輝く丸い星がピューッと糸を引いたの。じいが漁で使うカップも、じいの自転車もジャンパーも、みんな同じような緑色だった。不思議なんだけど、後でじいの遺体が見つかった場所が流れ星の消えたところの真下だったの」

彼女はこのように話してくれました。

津波の跡に残った一本松で有名になった陸前高田の男性は、幼稚園に通う2人の娘さんと奥さんを一度になくしました。6歳の長女が見つかったという連絡が彼のもとに届いたのは震災から約1週間後の夕方でした。避難所を彼は飛び出して、小走りに1時間かけて遺体安置所に向かって、娘と対面しています。枕元にはひよこの形をした幼稚園のバッジが置いてあったそうです。

夜、彼は停電で真っ暗な道を一人で歩いて、小学生の息子がいる避難所に戻りました。そのとき、夜道を照らすまん丸い月が涙でにじんで見えたそうです。

当時、三陸の大地は瓦礫と……すみません……（感極まって、言葉に詰まりながら）いかな……凍てつくような漆黒の海が広がっていました。……すみません。

季節はそれでも否応なく移ろっていきます。津波で折れた木の枝から一輪の桜が小さな花を結んだ春には、人々は死の物語の傍らに咲く命を見つめていました。

当時避難所では人々が一生懸命生きていました。物資の配給を自分からかってでる若者。黙々とトイレ掃除を続けるおじいさんがいました。性別とか、年齢とか、肩書きは全く関係ありません。そうした人々のさりげない行動がみんなの心に届いたように思います。

夏は暑かったですね。海は光り輝いていました。雑草が大地を覆い、瓦礫が異臭を放って、粉じんとハエが舞い上がっていました。はえ取り紙がいっぱいぶら下がっていて懐かしかったです。住める場所があるだけありがたい。多くの人々が感謝の言葉を口にしました。

そして、山々がカラフルに色づく秋には壁で仕切られた仮設住宅での生活が始まりました。そして人々は喪失感に襲われました。藍色の海が郷愁をかきたて、雑草が枯れ落ちた被災地にはうつろな空間が広がっていました。木枯らしが吹くと日はどんどん短くなって、落ち葉が心をかきむしるように音をたて、職を失った人は不安を募らせました。

冬は例年になく冷え込み、ドカ雪が降りました。何度も何度も降りました。狭い仮設住宅で身を寄せ合って暮らす生活に不安も募って、家族や隣人との衝突が起きました。被災地を覆う雪はまるで傷跡を覆う包帯のようでした。

正月は人手が少なかった。喪に服した人に新年という実感はわきませんでした。

◆「さん・てん・いちいち」という呼び方やんた」

そして、月日が進むと、みんながめぐり来る3月11日に否応なく向き合いました。被災地で暮らす人々からこんな言葉を聞いたのはその頃です。

「3・11（さん・てん・いちいち）という呼び方はやんた」。そんな言葉を幾度も耳にしました。震災は「3・11」という言葉で記号化された「過去」の出来事ではなく、彼らにとっては3月11日は「いま」につながる時空にあったように私は思いました。

1年間にわたり私は、海を毎朝、そして夕方、見続けていました。人生でこれだけ海を見た経験はないように思います。水平線にのぼる朝日、夕日に輝く水面、そういうものに人々が紡いでくれた言葉がわき上がるような気がして、私は「生老病死」という言葉を思い浮かべました。「生きる。老いる。病を得る。死ぬ」という、人間の一生を物語る仏教の言葉です。

「生きる意味って何だべよ？」

「悲しみが時を解決してくれるっていうのはウソだべよ」

「頑張れって言われるとすごくつらくなる。私はこれ以上頑張れない」

人々は涙を浮かべながら、私にそういうふうに関わってきました。

「女房の後を追って自殺をしたい」。パートナーを失った年配の男性にそう言われたときは、何も言うことができませんでした。

「お父さんね、この間、星の間で笑っていたよ」。そう言ったのは、お父さんを亡くした小学校3年生の言葉です。

「あの世で再会するまで思い出をいっぱい

つくろう」。津波で妻と2人の娘、そして会社員の職を失った男性は仮設住宅の遺影の前で小学生の息子とこういう誓いをたてました。

◆「生ぎろよ～！ 万歳！ 万歳！」

津波に巻き込まれた大船渡の74歳のおばあちゃんの家族に出会いました。亡くなったそのおばあちゃんの後を追って、死にたいと考えた長女を思いとどまらせたのは亡くなる寸前に、その母親が家族に向かって叫んだ「生ぎろ！」という叫び声でした。

津波が大船渡の防波堤を越えて襲いかかったとき、海のそばのその家にはおじいちゃんとおばあちゃんと次女と、ダウン症の孫娘がいました。おばあちゃんは携帯電話を探すのに時間がかかったようで、玄関から姿を見せたときには津波はもうすぐ後ろまで迫っていたそうです。

そして、道路に停めた車の中では、おじいちゃんが、いつでも出発できるようにエンジンを吹かし、後部座席には次女と孫娘が座っていたそうです。車の中にいた3人は、おばあちゃんの叫び声を覚えています。

「行げ！ オラのことはいいがら、振り向かぬえで行げよ」

おじいちゃんがアクセルを踏んだのはそのときです。遠ざかる車の後ろからもう一度はつきり聞こえたそうです。「生ぎろよ～！」そして「万歳！ 万歳！」という叫び声が聞こえたそうです。

おばあちゃんがどういう気持ちで言ったのかわかりません。ただ、私にはおばあちゃんが自らの命を投げ出してでも家族を救おうとしたのではないかと感じました。

妻子3人を一度に失ってひとりぼっちになった郵便局員の男性もいます。彼はいまだに生きる意味がわからないと繰り返しています。

◆記者とは人の心と営みを「記す者」

「何のために現地で取材を続けるのか？」。私は何度もそう問われて自問してきました。

新聞記者というのは、人の心と営みを記す者ではないかと私は思っています。時には、取材が相手の心の中に手をつつこんでかき回すことになることは承知しているつもりです。失敗もいっぱいあります。何度も何度も足を運んで貴重な時間を皆さんにいただきました。頭の下がる思いであります。時には泊まり込んで、時にはいっぱい酒を飲み交わして、徹夜で語り明かした日もありました。

彼らの体験を薄皮をはぐように、「そのとき、どんな音がしましたか」「何が見えましたか」「どんなにおいがしましたか」と、本当にしつこく、しつこく問いかけて、それにお付き合いいただいたような気がします。

ですから、今回の賞の本当の受賞者は、被災地で今も暮らしておられる方々であり、亡くなった方々であり、そして彼らの傍らに寄り添っている人々ではないかと思っています。

私は4月上旬に青森の八戸から海沿いの道をずっと自分で運転しながら1週間ほどかけて東京に戻ってきました。青森では横殴りの雪が降っていました。三陸沿岸をずっとたどって宮城県境を過ぎると、春の気配が立ち上がってきました。梅の花が咲いて、ウグイスの声が聞こえました。福島原発周辺の立入禁止区域をずっとつたいながら、東京に戻りました。

狭い島国の日本ですが、体で体験する日本列島は南北にずっと続く列島でした。

途中の被災地は、形を変えながらもいまだに津波の傷跡が生々しく残っていました。三陸のリアス式海岸の景勝地は津波の傷跡がいまだに残っていましたし、地震で陥没した宮城県以南の砂浜は、波よけの土嚢やテトラポットが延々とつながっていました。立入禁止になっていました。

福島原発の周辺では、住民が避難して空き家になった家々と放置された田畑が、痛々しく見えました。

◆被災地の人々の物語を語り継ぎたい

そして東京に戻って、私は東京と被災地の乖

離にショックを受けました。景気は東京も低迷しています。高齢化も進んでいます、都会の街角はまるで異空間のように若い人々がいっぱい歩いて、モノと人と情報が溢れているように思いました。

そして私は都会に住む人々と会話を交わす中で、震災の記憶が過去のものになっているような印象を受けてなりません。

原発の教訓も電力不足というかけ声のもとで、矮小化されて、真相究明も曖昧にされています。「復興」や「絆」という言葉も繰り返し繰り返し使われているうちに、被災地が直面している現実やいろんな問題を包み隠して、思考遮断に陥る言葉のように私は思えてなりません。

そして今、私の心の中にわき上がっている思いがふたつあります。ひとつは、生と死は決して断絶されたものではなくて、同じ地平にあるものじゃないかという思いです。三陸の被災地には、震災で大切な人を失った人たちが星の数ほど存在します。私はそこを訪ね歩いて、いろんな言葉をいただきました。

悲しみは決して時が解決してくれるものではなく、うつろい続けるものだということは皆さんにお会いして学んだことです。

さっきお話しした女子高生はこういう言葉を言いました。「私はじいを心の中で生かす」。「このごろさりげない自分のしぐさや表情に、『あ、亡くなった母親と同じだ』と思う瞬間がある。震災直後は遠くに行ってしまったように思えた母が私の中に生きていると思う」。これは母親を亡くした女性の心に芽吹いた思いであります。

「最近、夢の中で、死んだ女房と世間話をしてるんだよ」と言った70歳の男性がおっしゃった言葉も、ふたつの言葉に通じるものだと思います。

私自身、亡くなった方々とお会いしたことはありません。でも何度も何度もお話を伺う中で、いつの間にか、彼らが私の中にもいる思いがするのはなぜだろうかと考えています。

もうひとつは、震災が我々に突きつけたいろんな教訓や問いかけを風化させないことが震災

にかかわった記者として、そして三陸の地を故郷と思う 1 人の人間としての努めではないかと思っています。

物語は語り継ぐことで生かされていくものだと思います。ですから、私もこれから、通い続けながら、彼らの思いを記したいと思います。被災地で出会った人たちには、ご迷惑でなければ、一生付き合いをしてくださいとお願いしています。

以上です。ありがとうございました。

すみません。途中で取り乱してしまいました。お許してください。

司会 ありがとうございました。

次に、日本記者クラブ賞特別賞を受賞された福島中央テレビを代表して佐藤崇さんにお話をいただきます。よろしくお願いします。

◆いまだ 16 万人が避難生活を

佐藤崇 福島中央テレビ報道制作局長 福島中央テレビでニュースの責任者をしています。地方局が何をしているかは皆さんご存じないでしょうから、少しだけその話をさせてください。その後、映像をご覧いただこうと思います。

福島中央テレビは日本テレビ系列の全社員およそ 100 人のローカル局で、ローカル局では中規模です。報道制作局員は 33 人で、そのうち記者は 12 人です。

この 12 人の記者で、今回の東日本大震災に、それに続く福島第一原発事故にどう対応したのか。それについて、昨年の大晦日に 55 分番組を作り、県民の方たちに見ていただきました。今日はそれを 16 分くらいまとめてきましたので、まずそれをご覧いただくと、一番わかりやすいかなと思います。

<映像放映>

佐藤 55 分番組の中の 16 分だけご覧いただきました。この後、番組の中ではあれから数カ

月の間に県民がどういう事態に直面したのか、私たちが何を県民に伝えようとしたのか、そして伝えられなかったのか、その辺のところを検証しています。

今日いただいているテーマが、「あの時、そして今」ということですので、ここからは今の福島についてお話をしたいと思います。

最初、データの的なことを申しあげます。福島県の震災前の人口は 203 万人。それが今年 4 月のまとめでは 197 万になりました。1 年間で 6 万人が減ったことになります。そして今も自主避難を含め、10 万人が県内で、そして 6 万人が県外で避難生活を送っています。逆に言うと、今、福島県内で生活しているのは 191 万人という計算です。

◆放射能と折り合いをつけるしかないのか 親たちの悲痛な声

福島で暮らす人たちが事故から 1 カ月、2 カ月たった去年の 5 月とか 6 月に、みんながどういう気持ちだったのかを最初にご紹介したいと思います。

——『テレビや新聞、そしてインターネットなどでいろいろな情報が出てくる。でも、いくら調べてもよくわからない。危険なのか、危険じゃないのか、避難しなくてはいけないのか、しなくてもいいのか、やっぱりわからないのです。』

でも、いざ避難して生活しようとする、経済的な余裕なんかとてもありません。行った先でどうなるかもわからないし、今やっている仕事を辞めたらどうなるでしょう。将来の見通しもない。

子どもたちは友達と離れたくないと言います。自分もそうです。病気の親や高齢の親を連れて避難生活に踏み切れる人なんて、そういないんです。田舎ですから、友達やご近所との付き合いも大事です。

とすれば、はっきり危険ならば避難するけれど、わからないならば、せめて放射線との危険を工夫しながら少しでも減らして、福島に住み

続けるのがいいのではないか』——そう多くの人は考えたと思います。つまり、放射線と折り合いをつけながら暮らしていこう、そう決めたんだと思います。私ももちろんそうです。

とはいいまして、折り合いをつけるのはなかなか簡単なことではありません。特にお子さんのいる家庭では大変です。福島は水がおいしいのですが、ミネラルウォーターを買って子どもたちに飲ませる、県内産の野菜などはなるべく食べさせないようにする、庭土を削り除染する、高圧洗浄機を買ってきて屋根も除染する、夏は子どもたちには長袖を着せてマスクをさせて登校させる——そうやって悩みながら、いろいろな工夫をしながら生活をしてきたわけです。

ですが、残念ながらそれに対して、「親として子どもに責任がとれるのか」「30年後に、10年後にこういうことが出たらどうするんだ」と。まだこれはいいほうでした。中には、「人殺し」というような書き込みまで、時にネットでは見られました。

これで本当に親は傷ついたんです。親は子どもたちのために本気なんです。ですから、たくさん悲痛な声が番組にも届きました。

よくあったのは、長く付き合った親しいお母さん同士なのに、一方は避難し、一方は福島に残っている。そうすると、一方からは「なぜ早く避難しないのか、早く避難しなさい」と言われ、でも言われた方は「何で避難をするの？ 福島を離れて裏切り者」というような言い合いになって、親しいがゆえに、一層憎み合っかって音信不通になってしまった。そんな話は実は多く聞かれました。

◆「分断」される福島

福島はそのように、いたるところで分断されてこの1年を過ごしてきたと思っています。

警戒区域の中では避難を強いられますので、当然分断されます。そういう警戒区域でなくても、放射線量の高い地域と低い地域では意識が違います。人の気持ちりが分断されます。親子が分断され、場合によっては夫を福島に残して家族が避難し、家族は分断されます。友人と別れ

ます。学校と離れます。農業、漁業、酪農など、長く一生懸命打ち込んできた仕事なんです。その仕事からも離れざるを得ない。そうやって分断され、そうしているうちに福島と福島以外とがだんだん分断されてきたような気がします。

多くの福島の人には思いました。本当に情けない、悔しいんです。だって今までやっていたことができないのですから。本当に理不尽でしょう、不条理ですよ。

そうしているうちに、先ほどのお母さんではないけれど、だんだん分断が孤立になり、行った先で孤独でつらくて、そしてそれが望まないのに対立になっていく。そういう状況が続いてきました。

ですが、それから1年が過ぎまして、福島の空間線量もかなり下がってきました。私の住む人口33万の郡山市は、1年前には毎時1.3マイクロシーベルトぐらいあったのですが、今は0.5マイクロシーベルトぐらいです。それでも事故前が0.05ぐらいですから、大体10倍ぐらい。1年の被ばく線量としては1～3ミリシーベルトぐらい。国の基準の1ミリシーベルトをちょっと超えるぐらいです。

正直なところ、人によってその考え方は様々かもしれませんが、今の数値は、健康に影響が出るとは考えられないレベルだと思います。一番心配された内部被ばくについても、このところ、いろいろな検査結果、測定結果が出ていますが、それほど高いレベルではないことがわかってきました。

とはいっても、お子さんたちを心配する親御さんの気持ちは変わりませんので、努力は続けられています。でも夏になってきて、マスクをしてる、長袖という子どもたちはほとんど見られなくなってきました。

◆引き裂かれたままでは前に進めない

ですが、よくなってきたとは、今でも思えない。福島の課題は相変わらず山積です。

広いエリアの除染をどのようにしていくのか。少しでも放射線を下げるためにどうしてい

けばいいのか。できたゴミはどうするか。仮置き場をどうするんだ。町の中に仮置き場をつくりなさいと言われてるんです。中間貯蔵施設はどこにつくるか。そこに30年置いて、その後、県外にもっていくと言っているのですが、それを誰が信用しますかね。避難している人たちの補償の問題。将来が全く見えない中で避難生活を続けていることもあります。

今日午前中、日曜日に放送するドキュメントの最終仕上げを日本テレビでしてきました。農産物がテーマです。福島から基準値を超えるものが出たら終わりだと、生産者はみんな思っています。とにかく出さないようにしたい。基準値を下回っても、それをなお下げていく。できればゼロにしたい。そうやっていかないと福島の農業、漁業、酪農は復興しないと思っているのです。だから本当に一生懸命頑張っています。

けれども、残るのは「分断」「孤立」「対立」なんです。これはまだ消えないんです。これがあるうちは、福島はまだまだ復興に向かって進むことさえできないんです。やっぱりみんなの気持ちが…。

私たち地元メディアの課題は、今年2年目になって本当にきつくなっています。去年は、起きたことを伝えればよかった。でも今は、毎日毎日、同じ状態なんです、つらいのは同じ状態でずっと続いていること。そういうときに、先ほど萩尾さんもおっしゃっていましたが、どんどん風化というか、だんだん伝えられることも少なくなってきた、人の心からどんどん消えていくんです。

ですから、福島もそうですが、宮城、岩手、せめて被災地と被災地以外とが分断しないように、その分断が解消されるように、ぜひ皆様方のお力もお借りしたいと思います。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。分断という深刻さが伝わってきたと思います。

では最後に、特別賞を受賞された、石巻日日新聞を代表して武内宏之常務取締役報道担当にお話しいただきます。震災当時は報道部長でい

らっしゃいました。

今日、会場にもお持ちいただきましたが、壁新聞を6日間、6種類つくって、避難所やコンビニに貼られました。これは『6枚の壁新聞』という本にもなっています。

◆まだ「あの日」に戻ってしまう

武内宏之 石巻日日新聞社常務取締役報道担当 萩尾さん、佐藤さん（話を聞いて）、福島の今の映像を見ると、あっという間に、あの日のことに返ってしまうのが被災地の人の今の気持ちかなと思います。

先日、小学校6年生の教室でお話しする機会がありました。その休み時間に男の子2人と廊下で話してたんですね。何かと言うと、日本代表のサッカーのことです。サッカーチームに入って、自分もサッカーの日本代表になるんだと。夢中で話してくるのですが、いつの間にか、あの日の話が、子どもたちから出てくるんです。

ちょうど沿岸部の小学校で津波を、あの日、目の当たりにしている子どもたちです。「あの日、川から水が溢れてきて、校舎に迫ってきた。すごく怖かった」——こちらから聞くのではなく、サッカーの話から突然そこに移っていく。

被災地は1年3カ月過ぎているのですが、3月11日の話になると、本当にまだわっと、あの日に戻ってってしまう。そういうのが、今の被災者の、そして今もその場所に住んでいる人たちの気持ちかなと思います。

お二人の話を聞いていて、今日は話す内容を考えてきたんですが、混乱してしまって…話がぼっと飛んでしまいました。

◆心からわき出た感謝の言葉

ただひとつ、確実に皆さんの前で話さなければならぬこと、言わなければならないことは、3月11日震災後、全国各地から本当に多くのボランティアの方に来ていただきました。

あのとき私たちは自分の会社、自分の家を自分で泥かきしなければならなかったんですね。早くしないと乾燥して固まってしまう、におい

も発生してしまう。だから、早くしなければならぬと頭ではわかるのですが、ひとかき、ふたかきすると、体が動かないんですね。頭で「早くやないと、早くやないと」とわかっている、体が動かない状況でした。

その中で、ボランティアの皆さんに来ていただき、皆さんが黙々とやってくれるのです。その姿を見たときに、感謝という言葉——これは震災前から社交辞令上、「ありがとうございます」「感謝します」と使っていましたが——震災後は、同じ感謝でも本当に心から出る感謝でした。心から出てくる感謝という言葉が被災地の人間は、本当に実感しております。

去年の夏あたりから、津波に襲われた店のシャッターや町内会の広報板に、「全国のみなさん、ありがとう」という言葉が貼り出されたり、「感謝します」という言葉があちこちにあふれました。

今日、会場に大勢の方がいらっしゃるということで、まずは申しあげなければならないことは、これまでの1年3カ月の間の皆さんのそういったボランティア、支援、そして何よりも、被災地に思いを寄せていただいていることに対して感謝申しあげたいと思います。本当にありがとうございます。

◆停電、断水、輪転機も浸水

私の新聞社は新聞の中でも地域紙というジャンルの中に属します。毎日、夕刊を出している新聞社です。社長以下、役員も含めて、震災当時は28人。小さな新聞社だったんですが、あの日——「あの日」というのは、先ほど萩尾さんもおっしゃっていましたが、被災地では本当に「3・11」って簡単に言うなよ、という気持ちはあります。「あの日」と私たちも使っていますし、被災地では「あの日」というのは2011年の3月11日ということになっています。

沿岸部から内陸に1キロくらいのところに当社があります。大きな揺れの後、大津波警報が発令されていたのですが、大津波警報は前年のチリ地震でも沿岸部で発令されていました。そのときは石巻でも、ちょっと道路に水が上がっ

た程度。ちょっとではないですね、床上浸水の被害があったのですが、それでおさまった。

ですから、その1年後の3月11日、私たちの頭の中にも、大津波警報が出て津波が来てもヒザぐらいだろうという気持ちがありました。

ところが3月11日、石巻市の場合は、2時46分から約1時間後に津波が襲ってきました。防災行政無線があるのですが、石巻市の半島部、隣町の女川町では3mの津波が来た。時間が経つにつれて6m、そして10mという波が押し寄せてきている。「沿岸部の町は壊滅」と放送されるようになりました。3m、6m、10mという数字を聞いても想像できないのです。

波というと、海水浴場の波くらいしか沿岸部に暮らしている者には想像できません。その高さが3m、6m、10mというのは想像がつかない。入ってくる情報は、石巻市内でもどここの集落が壊滅、どここの橋が陥落したというものでした。私たちが夏になると行く海水浴場には数百体のご遺体がうちあげられているとか、そういう情報しか入ってきませんでした。

私たちの日日新聞は、地震直後から停電、断水という状況になりまして、電気がこないのパソコンも使えない。新聞社の心臓部分である輪転機という印刷機のところも浸水して1台は水没してしまいました。ですから、通常の新聞製作システムは使えない状況になったのです。私たちの会社の目の前では流されてきた車が山積みになり、瓦礫の山という状況でした。

ちょっと会社から出て見ると、流されてきた遺体があるのですね。そのとき思ったのは、本当に自然というのは容赦ないなということです。ここまでするかな、と思うぐらい、町を破壊して人の命を奪っていく。自然の怖さを実感しました。

◆創刊100年 何もしないことは自分たちの存在を否定することだ

その中で、これは私たちの社長である近江の言葉です——「私たちが住んでいる地域が、私たちが新聞発行している地域がこういう状態になっているときに、何もしないというのは、自

分たちで自分たちの存在を否定することだ」。

その言葉を聞いたときに、当時会社には、私と社長含め5人いたのですが、今考えると、すごいハイテンションになりました。

では、何をすればいいのか。電気も水もない中で、輪転機は動かない、パソコンは使えない。そういうときに、何をすればいいんだ——。実は、私たちの日日新聞は今年でちょうど創刊100年になります。その前年に、震災に遭ったんです。

若い記者がこんなことを言ったんです。「100年という大きな節目の前の年に、震災とはいえ、自分たちの代で新聞を出さなかったという記録はつくりたくない」。そんな若い記者の発言がありました。それを聞いたとき、私はうれしかったですね。なぜかという、若い記者もできることは何なのかともがいた。そしてもがいた挙げ句に、何をするとっても「伝えること」が自分たちの仕事だろうと考えた。

もう、電気もパソコンも使えないという追い込まれた中で、明日からの新聞をどうするのかというミーティングの中で出たのが、私たちの先輩たちの伝説です。

◆先輩たちのように「伝えよう」

それは何かというと、戦時中、日本では一県一紙政策をりました。うちのような小さな新聞社は廃刊にするか、または残る1紙に統合されるかという選択肢でした。私たちの先輩は、言うことをきかずに新聞を出し続けました。でも、やがて紙の配給が絶たれて、印刷による新聞は出せない状況になりました。やむなく「ペンを置く」というメッセージを読者に送った後、印刷による新聞は途絶えたのです。が、そのとき、先輩の記者たちは家にあったわら半紙や模造紙に鉛筆で記事を書いて、町内会に配ったのです。そういう伝説があったのです。

ミーティングでその話をしたら、社長が「じゃ、先輩たちのようにペンと紙さえあれば『伝える』という私たちの仕事はできるんじゃないか」と言ったのです。

震災の翌日の3月12日から17日まで6日間、手書きで壁新聞をつくって、避難所に持って行って、避難された方々に掲示しました。今日こちらに持ってきたものは3月12日付けの壁新聞です。

私たちの会社に電気がきたのは3月19日でした。そのとき、ネットも見られるようになりました。「書き込み」を見ていましたら、こんなことが書かれていました。「石巻日日新聞の壁新聞は小学生の壁新聞よりも字が下手だ」(笑)——。それが、私たちの壁新聞に対する最初の評価でした。

まあ確かに、見ると本当に字は乱雑ですし、行も書くごとに曲がっていったり…。間違うと、その部分に白い紙を切って貼って正しい字を書きました。それを避難所に持って行って貼り出した。ご覧のとおり、レイアウトも真ん中にボンと線を引いて、やっと発行した。「書き込み」にこう書かれるのも仕方ないかと、変に納得したことを覚えています。

◆このままでは心が折れてしまう

6日間発行したのですが、3日目から考えました。入ってくる情報は町が全滅したとか、町の壊滅という言葉や、死者数はうなぎ上りに増えていくとか、そんな情報ばかり次々入って来ました。これをこのまま避難所にいる人たちに届けたら、読む人たちは心が折れてしまうのではないかと心配になりました。

それで、3日目から優先順位を変えました。希望の持てる話題・記事を前面に出すようにした。ただ新聞社の看板を掲げている以上、やはり現実も知ってもらわないといけないということで、下の欄には被害状況を掲載しました。そのように3日目から優先順位を変えてつくった壁新聞を、避難所に持って行きました。

ただ、今も思っているのですが、希望を最初にもってきて、本当によかったのかどうか。新聞社として本当にそれでよかったのかどうか。新聞社は、やはり現実をきちんと知ってもらって、そして読者にこの町について考えてもらうためにも、現実を突きつけるというのが、新聞

の役目ではないか、と。

それを二の次といったら語弊がありますが、3日目から、変えてしまった。その頃、全国各地からボランティアの皆さんがやってきて、避難所には支援物資が届き始めていた。電気も1万戸復旧してきているというニュースも前面に出しました。でも新聞社として、現実をきちんと知ってもらわないで、希望だけでよかったのかどうか。これは今も、時あるごとに考えては悩んでおります。

◆「復興」という言葉は使わない

1年がたちました。被災地外では、「いよいよ復興も本格的」という言葉で言っていたのですが、被災地の人間としては、それは被災地外の人が被災した人たちに期待を込めての言葉かなと思います。冒頭に申しあげたように、被災者は、あの日の話になると、ぱっと戻ってってしまうという、心の状態にあります。たぶん、日本の技術ですから、町が壊されても、新しい町をつくり始めると、どんどん形ができていくと思いますが、被災者の心はまだあの日から抜け出せないでいる。そういうのが現状ではないかなと思います。

あの津波で家をなくし、仕事もなくし、そして大切な人を亡くした人が大勢おります。1年3カ月では、その人たちの心が癒えるというにはあまりにも短すぎるのかなと、最近、思えてきます。ですから復興というのは、被災した人たちがそれぞれに、それぞれのそのときが来たときに復興ではないかと思っています。

一律に「復興だ」というのは、地元の被災地の新聞社として、被災者に対して、あまりにも安易に使えない言葉ではないかと感じます。新聞でも、できるだけ「復興」という言葉は使わないようにしております。

日日新聞の活動を取り上げていただいた番組で、私の後輩がこんなことを言っています。

「毎日のように被災者の方々取材して接していると、取材対象者というより身内になってくる。だから、その身内に対して失礼な取材はできない」

こう後輩が言うておりました。まさしくその通りです。

一概に復興のスタートではなく、被災した方々それぞれが、きちんと、あの日の出来事を背負えるようになり、前を向くようになれば、それが石巻にとっても、被災地の皆さんにとっても復興のスタートではないかと思います。

これからもっと時間がかかるかもしれませんが、ここ東京にいらっしゃる方々も、もう少し、もうちょっと、被災地に思いを寄せていただいて、時々、思い出していただきたい。それがまた被災地の人たちにとっても大きな励みになるのではないかと考えています。

本当に進まない復興ではありますが、私たちもきちっと背負って、前を向くしかない。もうそろそろ腹をくくらなきゃいけない時期も来ているのかなと、そういった意味で1年3カ月経って、複雑な気持ちでいるというのが被災者の気持ちではないかと思っています。

最後に、3月11日、うちの新聞で使った見出しに、こんな見出しがありました。

「津波で多くのものを失いました。でも、多くのものを得た」

こういう見出しを作りました。その「多くのものを得た」というのは冒頭申しあげたように、それまで会ったことのない皆さんが、私たちのために駆けつけてくれた、その人間たちの温かみ、そういったものです。

失ったものについてはきちんと背負いながら、得たもので前を見ていきたい。見られるように、これから私たち日日新聞は、新聞を発行し続けて、地元の人たちに問いかけていこうと思っております。以上です。

司会 ありがとうございます。まず、私から質問をさせてください。

話の中でも、「3・11」という言葉を簡単に使ってほしくないという被災者の言葉がありました。福島では分断が起きて、それが深刻になっているという話もありました。1年3カ月ですが、まだ1年3カ月なのだと、聞いていて

つくづく思いました。

といいながら、東京あるいはほかの都市では、地震のことをすっかり忘れたような気分というか風化がおきているのは明らかだと思います。

3人の方にそれぞれ聞きたいのですが、今おきている風化の状況をどうしていけばいいのか。抽象的な質問ですが、一言ずつ、お話しいただければと思います。

萩尾 想像力だと思うんですね。人の気持ちはわからないだろうし、自分の気持ちすらわからないんだけど、目が見えない、聞こえないというのもそうでしょう。一生懸命、想像力というか、アンテナを開いて会話をする。

つらい話をやりとりしていると、聞く方がつらくなって、「そんなこと言わずに頑張れ」という言い方をするんですね。でも、そうすると相手はそこで発信をやめてしまうことは多々あると思います。これは記者というか、取材する側と相手というだけではなく、人と人との関係で、私も全くできてないんだけど、そういうのが大事で…。

その人の思いを少し想像して、意見が違ってても、価値観が違ってても、その人はどうしてそう思うのだろうか、そういうふうに使われているんだな、というようなとらえ方ができると…。すみません、答えにはなってないんだけど、少し変わってくるのかなという気がします。

佐藤 難しすぎて…。先ほども話しましたが、震災から2年目、自分たちは何をしようかと考えるんですね。考えるけど、考えつかない。

去年は何かわからないけど、一歩ずつ進めたような気がするんだけど、今は私たちにも状況が見えなくなっているんです。

ですから、普通、私たちのような立場の人間が「見えなくなっている」と言うてはいけなかもしれないけれど、普通の一般市民が風化にあらがって、我々はこうしていくんだと言ってくださる方がいてすごくうれしいんです。でも、難し過ぎますよね。

だから、私たちスタッフで今一番つらいのがそこですね。だから、本当にごめんなさい、風化に向かって何をすべきか、全く今、私は言葉を持っていないです。

武内 私は意外と、風化していくことに対しては世間はこういうものだろうと、あきらめとかいう問題ではないんですが、そう思います。被災地外の人たちはやはり時間がたつにつれて、自分たちの生活もあれば、仕事もある、当然、そちらに向いていく。時間がたつにつれてですね。そういう見方をしております。

ただ一方で、皆さんが被災地のことを忘れていくことに対しては、だからこそ、私たちも、そろそろ自分の足で立つ時期にもきているんじゃないか。1年3カ月たった今、そういう思いもあります。

こういう目で見ている被災者の方が石巻の場合は多いです。

司会 時間がおしてきましたが、会場から質問をいただきたいと思います。

質問 お三方以外に、大震災に関わるメディアの動きで注目されたものがあれば教えていただきたい。

佐藤 圧倒的にネットですね。ネットはすごいですね。

福島の場合、南相馬市長がネットですずっと発信して、窮状を訴えました。でも、自分たちはネットと向き合っている時間はあまりなかったのです、実は。日々報道したり取材したりで精一杯でした。

だけど、気がつくともネットの中でたくさんの情報が流れていて、それには貴重な情報もあれば、その一方、さっき私が話したように、非常に苦しめられるものもあった。

けれども、このネットは、もし仮に次にこういうことがあったときには、もっと変わっていただかなければならないと思います。私はネットを評

価する一方で、ネットでつらい思いをした、そのどちらもあると思うので…。今回は、本当にそう思います。

萩尾 私は書いた本数がたまたま多いだけで、今具体的にいつのどこの新聞、報道とは言えないけれど、一読者として気持ちが動いた記事はあります。

そういう記者と現場で出会うことがあるけれど、彼らは地元の人に記者とか何々新聞というのではなく、名前で見えられていますね。

それとネットの話が出ましたが、みんながみんなそうではないですね。ただ情報のもとがネットということで、ややもすればネットで検索して取材に行くんですね。

なぜこんなに広く、そしてこんなに被災した方々が多いのに、どうしてここに行列をつくっているんだろうと。そういうのが私の中で生まれた疑問でもあり、逆に、そういう中で、ほとんどネットを使わない私がたまたまここにいることになったのは、変な言い方ではなくて、私は自分でおごるつもりはないんだけど、とてもいい記事を書いた記者もいる一方で、これでもいいのかな、というような現象も私は感じるがありました。答えになっていないと思うけれど…。

武内 石巻という小さなエリアの話ですが、記者6人のうちの3人の車は津波でやられてしまったんですね。車で動くにしても、先ほど申しあげたように道路はへどろ、瓦礫です。ですから、私たちは歩いて、あるいは自転車で行ける範囲でやってきたんです。

壁新聞をつくった後、私は会社の門の前で通りすぎる人ひとりひとりに話しかけたんですね。どちらから来られたのですか、とか。情報をとるために話かけました。

半島の方から来たという方には、半島ではどうなっていたかと情報をとって、市役所の災害対策本部にチェックして記事を書いていました。そのときに感じたのは、あの状況の中で話してくれた人たちはすごく正確に伝えようと、話そ

うとしてくれるんですね。

ですから、その意味では、新聞社の記者が伝えるだけではなくて、ああいうときは、ひとりひとりの被災者の方がみんなのために正確に伝えようとしていたとすれば、そういう人たちもある意味でジャーナリストであり、記者ではなかったかと思います。

司会 そろそろ終了の時間です。先ほど、控え室で皆さんに一言ずつ書いていただきました。それを紹介して、お一人ずつ言葉をいただいて、終わりにしたいと思います。

萩尾さんは、「一記者たらん」。

萩尾 そのままで、ずっと現場にいたいと思っています。

司会 武内さんは、「地域愛」。

武内 地域あつての新聞社と私たちはとらえています。その地域がこういう状態になっていますから、私たちももがくのが当然。でもやはり、その地域に、こういう状態になってしまったなら早く回復して欲しい。そういう願いを表現したのが、この「地域愛」ということです。

司会 佐藤さんは「福島で続けます、福島から続けます」。

佐藤 続けるというのは、福島原発事故は数年ではなく30年、40年、もっとだと思っています。そのとき、「続ける」ことがすべてになるのではと。私たちの仕事もそうだし、後輩にも伝え続けていかなければ向き合えないと言っています。

司会 まだまだ震災は続いている。全然終わってもいないのだと、つくづく感じました。本日は大変ありがとうございました。

(文責・編集部)